ISSN 1340-8070

BRIDGE

同朋大学“いのちの教育”センターだより

INDEX

コロナの時代を生きる ………………………… 1
～「親鸞と現代」の授業を通して～
児童福祉といのち ……………………………… 2
～祖父江文宏さんを想いつつ～
生老病死を肯定する介護福祉の実践 ………… 3
～社会福祉法人貴和会の取り組み～
医療現場における「いのち」に関わる
差別を考える ………………………………… 4

同朋大学“いのちの教育”センター
〒453-8540 名古屋市中村区稲葉地町7-1
TEL 052-411-1373
Eメール宛先　inochi@doho.ac.jp

　コロナは収束の兆しを見せず、また世界情勢はウクライナとその周辺をめぐり緊迫しています。まさに「五濁悪世」の中で、浄土真宗という仏教の精神に基づき〝いのち〟の問題を考えます。今年度はコロナ状況下、対面・配信のいわゆるハイブリッド形式で講座を行いました。その全５回のうち、４回分の概要を収録したのが今号です（残る１回は次号掲載予定）。巻頭は今年度でセンター所員を退任する森村森鳳先生の文章です。いずれもご味読ください。

2022.3.31 NO.55

コロナの時代を生きる
～「親鸞と現代」の授業を通して～

森村 森鳳

　深刻なコロナの異常事態に今、私たちは生きています。私たちの人生の中にはこうした逃れられない悲劇が突然まぎれ込んできます。その時、穏やかな日常の中では隠されている人間の闇が露呈してきます。

　このような事態に、私たちは、どう流されずに、一歩を踏み出していけるでしょうか。この厳しい現実に、私たちは、生きることとは何か、人間とは何のために生きるか、人間はどのように生きていけばよいか。あらためて、深く問いかけられていると思います。

　私は毎年、本学の全学必修科目である「宗教と人間（親鸞と現代）」の授業で、親鸞の生涯についてお話ししてきました。その時あらためて気づかされたことがあります。親鸞聖人は、平安時代の末期から鎌倉時代にかけて戦乱や災害が相次いだ時代に90年の生涯を送りました。親鸞聖人は、自身の苛酷な人生体験の中で、人間の闇を深く見つめ、仏教の真実と深く出会いました。その真実の教えを人々に伝えようと、著作や布教を続けました。

　時代や状況は異なりますが、親鸞がその時代に直面した過酷な現実から、今を生きている私たちが学ぶことは多いと思われます。

　私はこれからも、仏教・親鸞の思想の核心になる言葉、縁起・慈悲・悪人正機などを学びながら、特に親鸞の『教行信証』の精神が凝縮されている「聞くところを慶び、獲るところを嘆ずるなり」という文の深意を受けとめていきたいと思っています。皆さんとともに問いながら、それぞれの人生の道を歩みながら、ともに学んでいきたいです。

（文学部人文学科　教授）

児童福祉といのち
～祖父江文宏さんを想いつつ～

井上　　薫

私は、1983年４月より16年間、愛知県児童相談所の心理職として勤務し、保護を要する「小さい人」とその家族の支援に従事した後、大学の教員になりました。その間、祖父江文宏さんと出会い、多大な影響を受けました。

文宏さん（1940年～2002年）は、名古屋生まれ、早稲田大学で演劇を学ぶものの、帰郷して保育園を手伝い、障害児保育に力を注いでいました。その後、児童養護施設「暁学園」施設長に、さらにCAPNA理事長にもなりました。国会の特別委員会にも招致され、児童虐待防止法制定にも貢献しました。書籍や絵本やマンガ、TVドラマ、演劇等で彼の仕事を確認できます。

私は、彼が施設長（彼は「園長すけ」と呼ばれていた）の施設に通い、「小さい人」（彼が子どものことをそう呼んだ）たちの回復・成長の応援に携わりつつ、彼の思想・実践を見聞しました。

彼は、職員に対して「殴るな」と言い、一切の暴力的関わりや力関係に基づく関わりをしないよう伝え、「まず目の前の人に向き合って」と提案していました。「必要なことを必要な人に」と、既存のしくみがないならば、自前でそれを作りました。

また、「すてきな笑顔ありがとう」と小さい人とのふれあいを大切にし、「小さい人が王様の世の中を作りたい」と目を輝かせ熱く語りました。それは「先に生まれた大人の小さい人への責任」の自覚によります。

彼の思想・実践は今後のわたしたちの進む方向を示唆しています。私は、小さい人や若い人に対して「自分が安全・安心感の場所となる　そして探求の旅をしてもらう　つらい時はいつでももどっておいでよ」と伝えたいと思います。「こころでこころを想う　わたしの理解は誤解かもしれない　だから決めつけずに対話する　共通の安全・安心感の場所を作ろう　それができればさらにその先を一緒に進もう」という姿勢で関わりたいです。その上で、「少し大きくなったら小さい人をよろしくね」と彼からのバトンをつないでほしい、と思います。

（社会福祉学部　教授）

生老病死を肯定する介護福祉の実践
～社会福祉法人貴和会の取り組み～

下山　久之

日本では、1970年代半ばまでは在宅での看取りが広く行われていた。しかし、1977年に在宅での看取りと病院での看取りが逆転してからは、人が亡くなる場所が病院であるかのようになっていった。高度経済成長期に、あわせて高度医療が整い、病院では生命維持装置を使用することは、特別ではなくなっていった。このような過程の中で、生活から「死」が切り離されていった。

現在、介護保険制度では「看取り加算」が設けられ、本人や家族が望むならば施設や在宅で介護保険制度を活用しながら、人生の最後の時を過ごすことが出来るようになった。しかしながら、高度経済成長期以降に「死」をタブー視し、生活から「死」を切り離してきたため、再度、生活の中に「死」を取り戻すことは容易ではない。

社会福祉法人貴和会では、高齢期を生きる方の「死生観」を尊重し、ご本人が望むならば最後の時まで施設でお過ごしいただきたいと考えている。だが、すべての専門職が等しく「死生観」を確立しているわけではない。高齢者が自然と「死」について語っていても、それをどのようにお聴きして良いのか分からず、戸惑いを見せる職員も見られる。

「人はやがて亡くなっていく」ということを受け入れたならば、残り少ない時間の中で過剰に我慢させることなく、好きなように食べ、好きなように過ごしていくことを認めることも出来るようになるであろう。狭く、医療・保健・福祉の専門職だけで「死」について考えるのではなく、日本社会の中で再度、「死生観」を見つめ直し、「死」を生活に取り戻す実践が必要になっていくのではないだろうか。貴和会は、そのような過程の中で戸惑いながらも、何とか生老病死を受け入れていきたいと願い、実践を重ねているところである。

（社会福祉学部　教授）

医療現場における「いのち」に関わる差別を考える

林　祐介

　私の主な研究テーマは、以下の２点である。①医療ソーシャルワーカー（MSW）による効果的な退・転院支援と②保証人問題（身寄り等が不在で、保証人が確保できないために、退・転院先が制約されている等の困難に陥っている状況）。とりわけ２つ目の保証人問題は、医療現場における「いのち」に関わる差別の最たるものだといえる。一方で、保証人問題以外にも、経済的事由による手遅れ死亡や受診控えといった「いのち」に関わる差別が、先行研究のデータから確認されている。さらに、わが国が「健康格差社会」になっている現状が、先行研究の結果より示されている。

　今回は、私が研究している保証人問題の現状と課題について紹介する。保証人不在者でも受け入れてもらえる退・転院先は、数少ない現状がある。この問題が生じている要因は多岐にわたっており、病院・施設内にとどまることなく、行政や地域包括支援センター、社会福祉協議会など多方面に働きかけていく必要があると考える。

　保証人問題の解決に向けて、MSW に期待されている役割として考えられるのは、以下の４点である。１）保証人不在者支援に必要な価値規範・知識・技術の獲得と普及。２）時間や労力はかかることを前提とした患者に寄り添った丁寧な退院・転院支援。３）保証人がいなくても安心して病院・施設に入院・入所できる地域づくり。４）事例の集積と社会に向けた発信。その上で、身寄りのない人に対する地域関係機関の支援ネットワークを構築していくことが、保証人問題の解決に向けた重要な課題であると考える。

（社会福祉学部　准教授）

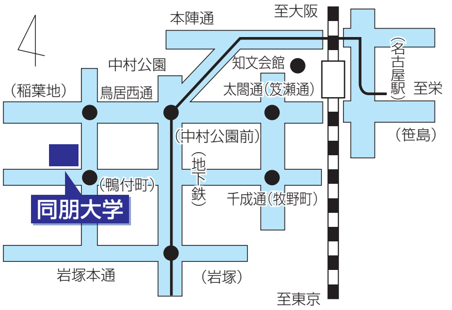
所　員

センター主幹：安藤　　弥（文学部 教授）
所　　　員：森村 森鳳(張 偉)（文学部 教授）
所　　　員：北島　信子（社会福祉学部 教授）
所　　　員：岩瀬真寿美（社会福祉学部 准教授）
所　　　員：市野　智行（文学部 専任講師）

お問い合わせ先

同朋大学“いのちの教育”センター
〒453-8540　名古屋市中村区稲葉地町7-1
☎ 052-411-1373

同朋大学 周辺地図



交通
市バス／栄又は笹島より㉔系統稲西車庫行、鴨付町下車
地下鉄／中村公園より⑬系統稲西車庫行、鴨付町下車